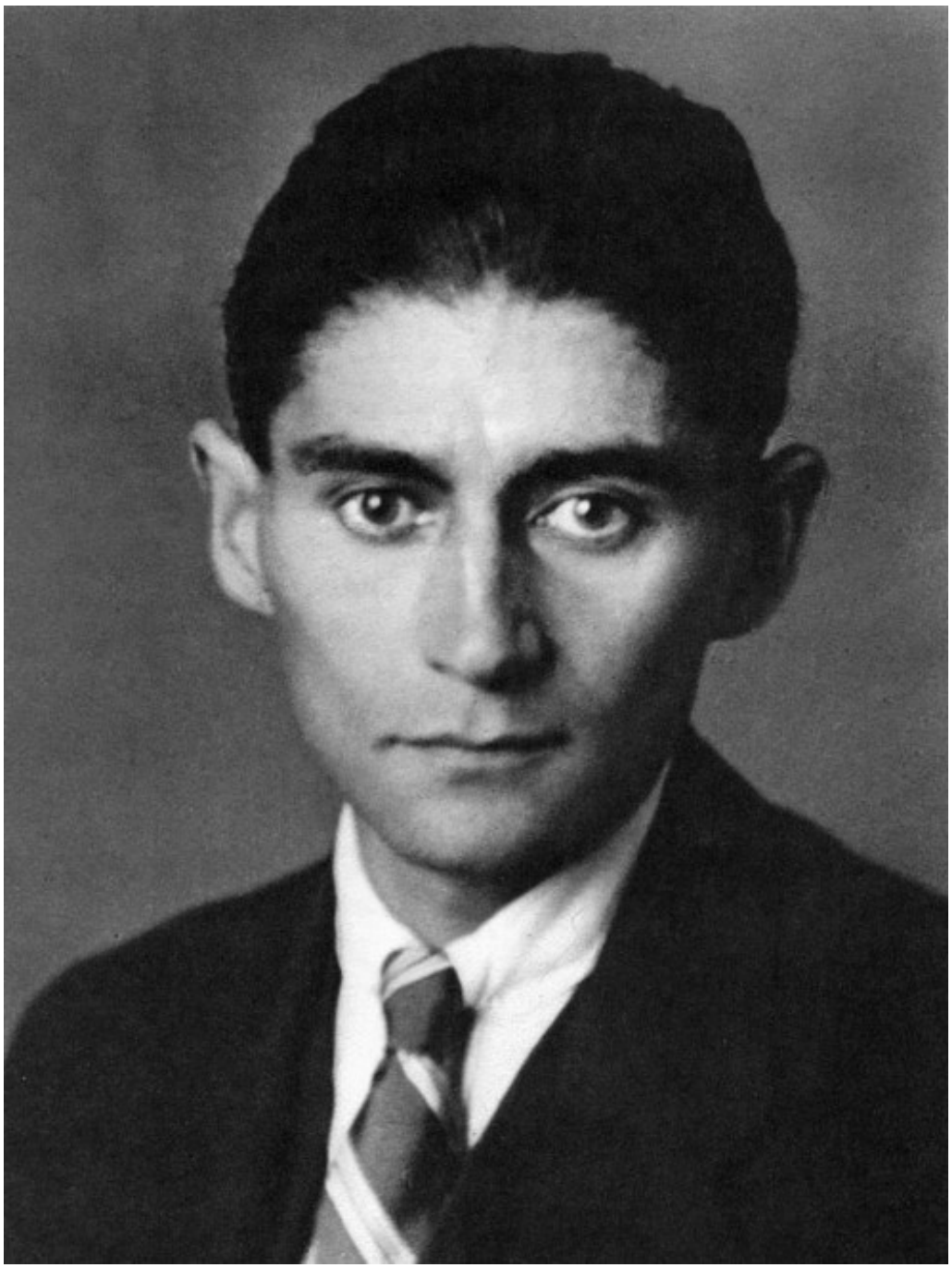

目次

流刑地にて 1

流刑地にて

「変わった機械なんですよ。」と、将校は調査旅行者に言うと、ある意味、賛嘆の目差しで（といっても、それは彼には周知のものであったが、）その機械を見た。どうやらこの旅行者は、ある犯罪者の処刑に立ち会えという司令官の招待を、社交辞令だけで受けたらしかった（上官への不服従と名誉毀損で、この犯罪人は有罪判決を受けていた）。この処刑に対する興味は、この流刑地においてすら、さほど大きなものではなかった。深い擂り鉢状になり、砂混じりで、草木は疎らにしか生えておらず、斜面で丸く閉ざされたこの小さな窪地には、少なくともこの将校と旅行者を除いては、有罪人（ボサボサの髪と無精髭をした、呆けた感じの、大きな口をした男）と、ひとりの兵士しか居あわせていなかった（兵士の方はズッシリした鎖を手にもち、そこからは小さな鎖がジャラジャラと出、有罪人は小さな鎖で足首と手首、それから首にも枷を嵌められて、それらは連結用の鎖で繋がっていた）。ちなみに、この有罪人は犬のように余りにも従順に見えたので、鍵を外して自由に歩かせても、処刑の開始と同時に笛を吹けば、すぐに戻ってくると思われた。

旅行者にとり、その機械は全くの無意味であった。ほとんどいかにも手もち無沙汰な感じで、有罪人の背後を彼はうろついたが、一方の将校は、最後の準備に余念がなかった。彼は、地中深くに埋められた機械の下で這いつくばったり、機械の上半分の調査のため、梯子を登ったりしていた。本来なら整備士に委ねる仕事でも、将校は大いなる情熱で取り組んだ。ひとつには、この機械の特別な信奉者だったからであり、ひとつには、また別の理由で、この仕事を誰にも任せられないからであった。「よし、これで完成！」と、最後に大きな声を出すと、彼は梯子から降りてきた。もうヘトヘトで、口を大きく開き、荒い息をしながら、二枚の柔らかな女物のハンカチを制服のカラーの奥にグッと押し込んでいた。「しかし、その制服を熱帯で着るのは、かなり無理がありますよ。」と、将校の期待に応え、機械について質問をするかわりに、旅行者はそう言った。「おっしゃる通りです。」と、将校は言うと、用意されたバケツの中でオイルやグリスで汚れた両手を洗った。「しかし、この制服が表わしているのは、わが故郷です。われわれは、故郷を捨てるつもりはありません。――まあ、とにかく機械をご覧下さい。」と、すぐにそう続けると、両手を布で乾かしながら、同時に機械を差し示した。「ここまでは手作業がいりましたが、ここから先は機械がやってくれます。」旅行者は頷くと、将校の後に従った。突発的な故障が生じることの言い訳として、彼は言った。「もちろん、故障はします。確かに今日は起こって欲しくないと思いますが、とにかく覚悟は必要です。この機械は、本当に十二時間、休みなく動きます。故障が起きても、本当に小さなものに過ぎないので、すぐに修復されるでしょう。」

「座りませんか？」と、ようやく聞くと、籐椅子を積んだ山からひとつを引っ張り出し、旅行者に勧めた。彼は断わらなかった。そこで穴の縁に腰を降ろすと、その奥の方にチラッと目をやった。それほど深い穴ではなかった。穴の一方の側には、掘り出した土が積まれて壁になり、もう一方の側には、例の機械があった。「司令官がもうこの機械について、」と、将校が言った。「説明したかは分かりませんが。」旅行者は、ハッキリしない手の動きをした。将校は、特にそのことに関心は払わなかった。なぜなら、ここから先は、自分で機械の説明ができるのだから。「この機械はですね、」と、彼は言うと、クランク棒をパッと取り、それに寄りかかった。「前司令官の発明なのです。わたしは、最初の試作からすぐに参加し、完成に至るまで、あらゆる仕事に携わりました。もちろん、この発明の功績は、全て彼だけのものです。前司令官についてお聞きになったことは？　ない？　話すにしても、この流刑地の設立自体が彼の仕事だという話を、今、声を大にして言うつもりはありません。われわれは彼の友人でしたが、亡くなった時にはすでに、この流刑地の設立自体、余りにも筋が通った話になっており、その後継者の頭に千の新企画が浮かんでも、少なくとも極めて長い期間、前の企画には一切、口出しできないのは分かっていました。予想は的中でした。新司令官は、そのことを思い知らされたのです。あなたが、前司令官をご存じないのが残念です！――とはいえ、」将校は話を中断した。「話が逸れました。目の前にあるのが彼の機械です。ご覧の通り、三つの部分からなっています。時を経るにつれて、これらのそれぞれの部分には、ある意味、民族的な名前がつけられました。下の部分は寝台、上の部分は製図屋、そして、この真ん中のブラブラした部分が、馬鍬です。」「馬鍬？」と、旅行者は聞いた。彼は、全く注意して聞いていなかった。ジリジリと強く、この木陰のない窪地に太陽が絡みついていた。誰もが自分の考えをまとめ上げられなくなっていた。それだけになお、窮屈な、パレード用の、房つきの肩章が下がった、革紐で飾られた軍服に身を包み、極めて熱心に彼に説明し、おまけに、話しながら、ドライバーを片手に、あちこちの螺をまだいじるこの将校が、驚嘆に値する人物だというのが、彼にはひしひしと伝わってきた。兵士も旅行者と同じ気もちのようであった。彼は、両方の手首に有罪人の鎖を巻き、片手は銃に寄りかかりながら、首はガックリと前に落とし、一切のことに関心を払わなかった。そのことは、旅行者には奇異と感じられなかった。なぜなら、将校はフランス語で話すのに、兵士も有罪人もフランス語を解しないのは、明らかだったのである。それだけになお、それでもまだ、有罪人が将校の説明に食らいつこうとするのが、とにかく奇異な感じがした。男は、一種の眠たげな辛抱強さで、将校がまさに指で差したところへずっと視線をやっていた。今、旅行者の質問で将校が話の腰を折らざるをえなかった時も、将校に倣い、旅行者をジッと見つめていた。

「ええ、馬鍬です。」と、将校が言った。「ピッタリの名前でしょう。針が馬鍬みたいに並んでいて、全体も馬鍬のように動くのです（一点だけで動きます。しかも、はるかに精密に）。ちなみに、それはすぐにお分かりいただけます。こちらの寝台に有罪人が横になります。――つまり、わたしは、この機械についてまず説明し、次にようやく手順そのものを実行に移します。それにより、これについての理解はさらに深まるでしょう。実際、製図屋の歯車のひとつはひどく摩耗しています。作動すると、キイキイ恐ろしい音を立てるのです。こうなると、もう会話は成立しません。残念ながら、ここでは交換部品が余

りにも入手困難なのです。――ということで、さっきも申し上げましたが、こちらが寝台です。全体がすっかり脱脂綿の層で被われています。その目的は、いずれお分かりになるでしょう。この脱脂綿の上に、有罪人がうつ伏せになります（もちろん、全裸でです）。男をしっかりと固定するため、ここに手、ここに足、ここに首の革紐が当てがわれます。こっちの寝台の頭の方の端（申し上げた通り、ここではまず顔を下にして、男は横たわりますが）には、こういう小さなフェルトの出っ張りがあります。それは、ちょうど男の口に入るように、簡単な調整が行なわれます。目的は、大声と舌の噛み切りの防止です。むろん、フェルトは受け入れられます。そうでなければ、革紐で首をへし折られますから。」「こちらが脱脂綿？」と、旅行者は聞くと、前屈みになった。「ええ、そうです。」と、笑いながら、将校が言った。「直接、触ってみて下さい。」旅行者の手を取り、寝台の上まで導いた。「特別製の脱脂綿です。だから、パッと見ただけでは分かりません。目的については、後でお話しします。」すでに少しばかり旅行者は、この機械に魅了されつつあった。日射しから守るため、目の上で手を翳しながら、上方にあるその機械を仰ぎ見ていた。それは、大がかりな構築物であった。寝台と製図屋は、同じくらいの嵩があり、二棹の黒い長持のようであった。製図屋は、寝台の二メートルほど上方に位置していた。二つは、四本の真鍮製の柱により、四つの箇所で繋ぎあわされ、陽光の中、柱脚はほとんど光線を発さんばかりであった。二棹の長持の間には、鋼鉄製のベルトで馬鍬が吊り下がっていた。

さっきまで旅行者が無関心でいたことに、将校は全く気づけなかった。しかし、今、生じつつある旅行者の関心には、鋭い嗅覚をもっていた。何の邪魔立てもなく、観察する時間を旅行者に与えるため、彼は、説明を一時中断した。有罪人は、旅行者を真似していた。目の上に手が翳せないので、自由になる目を上に向け、その目をパチクリさせていた。

「で、男が横になるんですね。」と、旅行者は言い、肘かけ椅子に身を任せ、足を組んだ。

「ええ、」と、将校は言い、縁なしの帽子を正しい位置にちょっと戻し、火照った顔の上に、手をやった。「では、お耳を拝借！　寝台にも製図屋にも、それぞれ独自の蓄電池があります。寝台は自分用に、製図屋は馬鍬用に、それを使います。革紐できつく男を縛ったら、すぐ寝台のスイッチが入れられます。精妙で、極めて素早い、縦横の両方の揺れを伴い、それはブルブルと震えます。似たような機械は、精神病院でも見たことがあるでしょう。ただし、この寝台では、全ての動きが精密に計算されています。つまり、馬鍬の動きとピッタリ同期せねばならないのです。そして、この馬鍬にこそ、判決の本来の実行が委ねられます。」

「判決は、どうやって言い渡されるのです？」と、旅行者が聞いた。「ご存知ないのです？」と、驚いたように言うと、将校は唇を噛んだ。「ひょっとして、説明が分かりにくかったら、ごめんなさい。本当に許して下さい。というのも、この説明は、以前は司令官がするのが常だったのです。しかし、新司令官はこの名誉ある義務を放棄しました。しかし、あの方がこういう高貴な来訪者の方に、」――そういう賛辞がされるのを、旅行者は両手で止めたが、将校は、あくまでもこの表現にこだわった――「こういう高貴な来訪者の方に、われわれの判決のやり方すら伝えないというのは、これもまたひとつの

改革なんでしょうが。それについては――、」と、恨みがましい言葉が口から出るのを、グッと堪えながら、ただこう言った。「それについては、知らされていませんので、わたしの罪ではありません。ちなみに、そうは言っても、ここでの判決のやり方を一番うまく説明できる人間はわたしです。なぜなら、ここのところに、」――彼は、胸の内ポケットを叩いた――「本件についての、前司令官のスケッチが入っているのですから。」

「司令官自身のスケッチ？」と、旅行者が聞いた。「じゃあ、彼は全ての役割を独占していたのですか？　つまり、軍人でもあり、裁判官でもあり、設計士でもあり、化学者でもあり、製図屋でもあったと？」

「そうです。」と、強張った、熟慮するような目つきで、コックリと頷きながら、将校が言った。それから、吟味するように自分の両方の手のひらにその視線を落とした。それは、スケッチに触ってもよいほど、十分に清潔ではないと、彼には感じられた。それゆえ、バケツのところに行くと、もう一度、バシャバシャと両手を洗った。それから、小さな革製の書類挟みを取り出し、こう言った。「われわれの判決は、厳格に言い渡されるのではなく、有罪人が踏み越えた法は、馬鍬で肉体に書き込まれます。例えば、この有罪人なら、」――将校は男を指差した――「次のように書き込まれます。上官を敬うべし！」

旅行者は、サッと男に目を走らせた。将校が男を指差した時、男は何か新しいことを聞き出すため、頭を下にし、あらゆる聴力を振り絞るかのようであった。しかし、分厚く、固く結ばれた唇の動きからは、明らかに、男が何も理解しなかったことしか読み取られなかった。色々なことを聞くつもりであったが、男がそういう様子なので、旅行者は、次のように言うだけにした。「あの男は自分の判決を知っていますか？」「いいえ。」と、将校は言うと、さらに説明を続けようとしたが、旅行者はそれを遮った。「自分の判決を知らないですって？」「ええ。」と、将校は再びそう言ったが、旅行者の質問のさらなる理由探しをしましょうかというように、それからちょっとの間、黙り込み、その後、言った。「教えても意味がありません。それどころか、この男はそのことを自らの肉体で思い知るのです。」旅行者は、有罪人が自分に視線を向けているのに気がつき、これ以上喋るまいと考えた。男は、今、語られた経緯をあなたは見過ごすつもりですかと、問うようであった。それゆえ、肘かけ椅子にすでに身を委ねた旅行者は、再び前屈みになりながら、それでも聞いた。「でも、そもそも有罪が宣告されたってことは、さすがに知ってるんでしょう？」「いいえ。」と、将校は言い、まだ幾つかのおかしな打ち明け話が聞けるのが楽しみだというように、微笑んだ。「そうか、知らないんだ。」と、旅行者は言うと、額にサッと手をやった。「すると、あの男は、今でもまだ、自分の弁明がどう受け取られたのかを知らないんですか？」「そもそも弁明の機会が与えられていません。」と、将校は言い、独り言でもいう感じで、自分にとっては当たり前のことを説明することで、旅行者にきまりの悪い思いをさせるのはよくないとでもいうように、顔を横に背けた。「弁明の機会は与えられるべきでした。」と、旅行者は言い、肘かけ椅子から立ち上がった。

将校は、機械の説明に時間を費やし過ぎる危険があると分かっていた。そのため、旅行者の方に歩み寄ると、腕を絡ませ、有罪人（その時、明らかに自分に注意が向いたので、直立不動で立っていた）を手で差しながら――兵士の方も鎖を引っ張っていた――、こう言った。「現状は、こうです。わたしは、この流刑地の裁判官に任命されています。この若さでです。なぜなら、実際、あらゆる刑事事件で前司令官を補佐しましたし、機

械のことを一番よく分かってもいますから。わたしが決定を下す原則は、以下の通りです。常に疑いの余地がないのは、そこに罪があることだ。他の裁判所で、こんな原則に従うところはありません。なぜって、他の裁判所は多人数制ですし、さらにその上に沢山の上級裁判所がありますから。ここではそういう風にはなっていません。あるいは、少なくとも前司令官の時代は、そうではありませんでした。ただし、新司令官は、わたしの裁判所への介入の意思をすでに示しています。しかし、これまで、それはうまく受け流されてきましたし、今後もさらにうまくいくと、わたしは思っています。――あなたは、この事件について明らかにしようとお考えですね。どこにでもある単純な事件ですよ。今朝、ある大尉から告発があったのです。彼の従卒をやれと命じられ、部屋のドアの前で寝ていたこの男が、寝坊で遅刻したというのです。つまるところ、時鐘が鳴る度に直立し、大尉のドアの前で敬礼する義務が、この男にはありました。それは、ちっとも難儀じゃない、むしろ欠かすことのできない義務でした。警護や勤務のためには、目覚めていなければなりませんから。昨晩、大尉は、その義務を従卒が果たしているかを調査しようと思い立ちました。二時が時を告げたのにあわせ、ドアを開けると、丸くなり、眠りこけた従卒を、彼は見い出しました。おもむろに乗馬用の鞭を掴むと、彼は、男の顔に振り下ろしました。すぐ直立して許しを乞うどころか、主人の両足を掴んで、ユラユラと揺すりながら、大声で、男は言いました。『鞭を放しなさい。さもないと、噛みつきますよ。』と――、こういう次第なのです。つい一時間前ですが、大尉がわたしのところに来て、わたしはその申し出を書き取った後、すぐ判決文を書き下ろしました。そして、まずこの男を鎖で縛り上げたのです。どこから見ても、極めて単純な話です。まず男を召喚し、尋問したとしても、混乱が生じただけでしょう。嘘をついたかもしれません。その嘘を見破ったとしても、新しい嘘が置き換わったでしょう。そんなことが続いたはずです。しかし、今ではわたしが男を捕縛しています。もう、男には何もさせません。――さあ、全ては明白ですか？　ところで、余り時間がありません。すぐにも処刑を始めたいのですが、まだ機械の説明が終わっておりません。」と、旅行者を無理やり肘かけ椅子に座らせながら、また機械の方に歩いていき、こう始めた。「ご覧の通り、馬鍬は人間の形をしています。こちらは上半身用の馬鍬、こちらは下半身用の馬鍬。頭部のためには、この小さな刃があるだけです。お分かりいただけますか？」と、いつでもあらゆる範囲に及ぶ説明をしますという感じで、彼は、親しげに旅行者の方に身を屈めた。

額に皺を寄せながら、馬鍬の方に旅行者は目をやった。訴訟手続きの説明には、満足できなかった。ともかく、ここが流刑地というのを頭に入れるべきだし、ここでは特別の処置が必要になるから、最終的には軍隊的な処置すら取ることになると、彼は自分に言い聞かせた。しかし、加えて、確かに徐々にではあるが、明らかに新たな手続き（この将校の融通の利かぬ頭では、決して受け入れられない手続き）を採用しようとする新司令官への少なからぬ期待も感じ始めていた。このような思考過程を経た上で、旅行者は聞いた。「司令官は処刑には立ち会いますか？」「それがはっきりしないのです。」と、突然の質問で気まずい感じになった将校が、親しげだった顔をサッと曇らせながら、言った。「まさにそのために急がねばならないのです。それどころか、非常に残念なことに、ここでの説明も省略せねばなりません。とはいえ、また機械の洗浄が終わる明日になれば――それくらいひどく汚れてしまうのが、これの唯一の欠点です――、もっと詳しい

説明をつけ足すこともできるでしょう。今からは、まあ、必要なことだけを申し上げます。――この男が寝台に寝そべり、寝台がブルブル震え出すと、馬鍬が身体の上に下りてきます。それは、沢山の針が身体につくかつかないかの位置に来るよう、自動的に調整されています。そこまでのことが完全に遂行されると、すぐにこの鋼鉄製のロープが一本の棒のようにピンと張られます。そして、今やゲームが始まります。事情通でなければ、この処刑における外見上の違いは見分けられないでしょう。この馬鍬は、単純に動いているようにしか見えないからです。震えながら、沢山の切っ先が身体の中に刺し込まれます（ちなみに、寝台によって身体もブルブルと震えさせられています）。そんなことで、誰でも判決の実行を確かめられるよう、馬鍬はガラスで作られることになりました。そこへの針の固定については、幾つかの技術的な困難が伴いましたが、多くの試行錯誤の末、それは実現しました。とにかく、どんな苦労も厭うことはありませんでした。そんなことで、どのように判決文が身体に刻まれるのかを、今では誰でもガラス越しに眺められます。もっと近くまで来て、針をご覧になりませんか？」

ゆっくりと旅行者は立ち上がり、そこまで歩いていき、馬鍬の上に屈み込んだ。「ご覧いただいて分かるように、」と、将校が言った。「二種類の針が何重にも連なっています。全ての長い針の横には、短い針が並んでいます。つまり、長い針は判決文を刻み、短い針は、血を洗浄し、判決文をくっきりと浮かび上がらせるため、水を噴射するのです。それから先、血が混じった水は、この細い水路の中に送り込まれ、あの穴のところまで排水管が繋がっているこの主水路を、最後はスイスイと流れていきます。」と、将校は、血の混じった水が流れるという経路を、指で示した。彼は、そのことをできるだけ目で見て分かるように、排水管の出口で、本当に両手で水を掬ってみせたが、旅行者の方は首をもち上げ、手を後ろに伸ばし、探りを入れながら、肘かけ椅子の方に後退りをした。と、その時、驚くべきことに、彼のすぐ後ろで、馬鍬の処置を近くから見てみろという将校の誘いに、あの有罪人もまた乗っているのが分かった。鎖の先にいる眠そうな兵士を少し前に引っ張りながら、男は、自分でも例のガラスの上に屈み込んでいた。おずおずした目で、たった今、二人の紳士が何を観察していたかを探ろうという風であったが、一切の説明がなく、何も飲み込めずに終わった様子が見て取られた。あちこちで、男は屈み込んでいた。何度も何度も、隅から隅まで、ガラスを見て回っていた。男は元の場所に押し留めるべきと、旅行者は思っていた。というのも、男がやったことは、おそらく規則違反だったのである。ところが、一方の将校は、片手で旅行者をサッと制し、もう片方の手で、穴の横にできた壁から土を取りながら、兵士に向けてポイッと投げた。パッと目を上げ、有罪人がすることに気づいた兵士は、銃を脇に置き、両足の踵で地面を踏みしめながら、すぐに足を取られるくらいグッと有罪人を引っ張り、その後、有罪人が身もだえしながら、鎖をガチャガチャ鳴らすのを、上の方から見ていた。「やつは立たせておけ！」と、将校が叫んだ。というのも、有罪人の所為で、旅行者の注意が、恐ろしく殺がれたのに気がついたのである。旅行者は、それどころか、馬鍬など眼中になく、馬鍬越しに身を乗り出し、ただ有罪人がどうなったのかを確かめたがった。「やつは大切に扱え！」と、将校がまた叫んだ。彼は、機械の外側を回り、自分の手で両脇の下から有罪人を掴むと、兵士の力を借りながら、何度も足を滑らせる男を立たせようとした。

「今、すっかり全体像が分かりましたよ。」と、再び将校が自分の方を向くと、旅行者

は言った。「肝心のところが抜けています。」と、将校は言うと、旅行者の片腕を掴み、上の方を差し示した。「あの製図屋の中に歯車が入っており、それが馬鍬の動きを決めます。判決文が書かれたスケッチに従い、この歯車は配列されます。わたしは、前司令官のスケッチをまだ使っています。これがそれです。」――彼は、革製の書類挟みから、何枚かの紙を引っ張り出した――「しかし、残念ながら、お渡しはできません。わたしのもち物の中でも、最重要のものですから。どうぞお座り下さい。この距離でなら、お見せできます。その方が、全体をしっかりご覧いただけます。」最初の紙切れを旅行者は見せられた。何か気の利いたことを言おうと、彼は思った。しかし、そこで見たものは、迷路のように互いに幾重にも絡みあった線でしかなかった（それらは、余りにもびっしりと紙面を埋め尽くしており、努めて見なければ、余白があることすら分からなかった）。「読んで下さい。」と、将校が言った。「無理です。」と、旅行者が言った。「だって、見れば分かるでしょう。」と、将校が言った。「大変、芸術的ですが。」と、ごまかしながら、旅行者が言った。「わたしには読めません。」「そうですか。」と、将校は言うと、ニッコリ笑い、書類挟みをまた懐の奥にしまった。「学童の手本じゃないですから。しっかり読めるまでには、相当な時間が必要です。最後には読めるようになります。もちろん、簡単に読めるようじゃいけません。やつらはすぐには死にません。むしろ平均十二時間くらいで、ようやく死ぬのです。六時間が変わり目です。つまり、沢山の、本当に沢山の装飾が、本来の文字の周りを取り囲まねばならないのです。実際の文字は、身体の上をただの一本の細い帯になって取り囲みます。残りの肉体は装飾用です。今ならもう、馬鍬やこの機械全体の働きを評価できますよね？――とにかく、見て下さい！」と、梯子に上り、はずみ車を回しながら、下に向かって叫んだ。「危ない、脇へ退け！」そうして、全体が運動を始めた。はずみ車がキイキイ鳴くのでなければ、もっと堂々たるものだったのであろうが。将校は、このはずみ車の騒がしさに驚くと、拳でそれに脅しをかけ、それから、すみませんねと言いながら、旅行者には両手を大きく広げ、機械の具合を下から見るため、急いで下りていった。彼にしか分からない話であったが、まだ何かがうまくいっていないらしかった。それから、またよじ登ると、製図屋にグッと両手を突っ込み、今度は素早い下降のために梯子は使わず、柱の一本を伝い、スルスルと滑り下り、この騒がしさの中でも自分の存在は気づかせたいという一心で、力の限り、旅行者の耳に向けてこう叫んだ。「流れについては、お分かりいただけました？　　馬鍬が書き込みを始めました。これが背中に最初の一筆を完成させると、馬鍬への新しいスペースの提供のため、脱脂綿の層が回転し、身体が横を向くまで、男にゆっくり寝返りを打たせるのです。そのうち、傷により、書き込まれた部分が脱脂綿の上に来て、この脱脂綿は特別の措置ですぐにそこでの出血を止め、さらに文字を深彫りするための準備を行ないます。その後、ここにある馬鍬の縁のギザギザが、さらに肉体が回転するのにあわせ、傷口から脱脂綿を掻き取り、それをあの穴の中に投げ込みます。そして、再び馬鍬は仕事に取りかかるのです。こんな感じで、十二時間ほどかけて、どんどん深く書き進みます。最初の六時間は、ほとんどこれまでと同様、苦痛で顔を歪ませているだけで、有罪人はピンピンしています。二時間後、フェルトが取り除かれます。なぜなら、叫ぶ気力がもうありませんから。この、頭の側の電気的に保温された鉢には温かい粥が入っており、自分の舌で舐め取れるだけの粥は、好きな時に食べられます。このチャンスを無駄にする者

はいません。色々、経験してきましたが、そんな人は見たことがありません。六時間が過ぎ、やっと食欲がなくなります。そうなると、いつでもここで跪き、その様子を観察しました。男が、最後の一口まで平らげるのはまれなことです。口だけでクチャクチャと噛み、それからあの穴にペッと吐き出します。その時は、身体を屈めねばなりません。でないと、自分の顔にかかりますから。しかし、まあ、六時間が過ぎた頃、どれくらい静かになるかといったら！　どんな阿呆の頭にも、理性が兆してきます。それは目から始まり、だんだん先に広がります。自分でも馬鍬の下に横たわりたいと思う光景。ええ、そこから先は、何も起きません。男が判決文を読もうとするだけです。まるで聞き耳を立てるように、男は口を尖らせます。ご覧いただいたように、判決文は、目で読むのも容易ではありません。それを自分の傷で読み解くのですから。とにかく大変な作業です。完成までには、六時間ほどを要します。それから、馬鍬がとどめを刺し、穴に投げ落とすと、死体は血の海と脱脂綿の上にピシャリと叩きつけられます。それで裁判は終わり。われわれ（わたしと兵士）は、男を埋葬します。」

将校の話に耳を傾け、上着のポケットに両手を突っ込みながら、旅行者は機械の動きを見ていた。有罪人もそれを見ていたが、意味の理解にまでは至れなかった。男は、ちょっと前に屈み、ぶら下がった針を目で追ったが、将校の合図で兵士がシャツとズボンの後ろからナイフで切りつけると、それは有罪人の身体からハラリと落ちた。男は、裸を隠すため、落ちていく衣服に手を伸ばしたが、兵士は男を高くもち上げ、最後のボロキレすらふるい落とした。将校は機械を止めさせた。そして、今、生じたばかりの静寂の中、馬鍬の下に有罪人を横たわらせた。鎖は外され、かわりに革紐が結びつけられた。最初のうち、有罪人はそのことをほとんど負荷の軽減のように受け取っていた。そして、今、馬鍬はもう少しだけ下降することになった。なぜなら、男は痩せていたのである。その尖端が触れると、その皮膚の上をビクッと戦慄が走った。男は、兵士が男の右手にかまけている間も、特に考えもなく、旅行者がいる方に左手をグッと伸ばし、将校は、そういう旅行者を脇からジッと眺めていた。少なくとも、今、サラリと説明した今回の処刑が旅行者に及ぼす影響を、その顔色から読み取ろうというようであった。

手首の関節を拘束する革紐がプツンと切れた。おそらく兵士が強く締め過ぎたのだ。あなたは助けてくれますよねと、兵士が、千切れた革紐の切れ端をヒラヒラと将校に示していた。将校も、当然、兵士の方に向かうと、顔は旅行者の方に向けながら、こう言った。「この機械は本当に寄せ集めです。あちらこちらで、切れたり、壊れたりします。しかし、それを理由に、判決全体の実行を躊躇する訳にもいきません。ちなみに、革紐については、応急の代替品を編み出しました。わたしは鎖を使います。もっとも、それによって、右腕に対する震動の繊細さは損なわれましたが。」鎖を装着する間も、まだこう言っていた。「機械の維持のための財源も、今は恐ろしく削られました。前司令官の時は、この使途のためだけに、自由になる予算がありました。ここにも倉庫があり、あらゆる補給品が保管されていたのです。白状すると、ほとんど浪費に近いこともありました（今、言っているのは、昔の話です。新司令官が言うように、今もそうだというんじゃありません。あの方は、古い慣行を打破する口実に、あらゆることを使おうとします）。今やあの方は、この機械の予算を管理下に置きました。そして、わたしが、新しい革紐が欲しいと人をやると、証拠の切れた革紐を出せと言い、十日後にやっと新品が届きますが、さ

ほど品質もよくなく、大して使い物になりません。そして、その間、革紐なしでどう機械を動かすかを気にする人は、ひとりもおりません。」

旅行者は思った。知らない関係の中に決定的に介入する際は、いつも由々しき問題が出来する。自分は、この流刑地の市民でも何でもない。この流刑地が帰属する国の市民でもない。もしこの処刑を糾弾、それどころか妨害するにしても、次のような答えが返ってくるだけではないか。あなたは外国人でしょう。黙っていて下さい。それには、返答の仕様がないかもしれない。それどころか、次のように言うだけかもしれない。わたしには、この事件そのものが分かりません。なぜなら、物見遊山の旅行中なだけで、他国の裁判制度を変えるつもりはありませんから。さて、そう言いながら、当地で見聞する物事は極めて魅力に富んだものであった。訴訟手続きの不公正さ、処刑方法の非人道性は疑いえなかった。旅行者の側に何かの身勝手さがあるとは、誰も思わなかった。なぜなら、その有罪人と彼は、顔見知りでも、同郷人でもなく、男に同情を誘うところもまるでないのだから。旅行者自身は、上級の役所の招待を受け、当地では極めて丁重なもてなしを受けていた。それどころか、この処刑に招待されたというのは、この裁判所への何かの評価を求めてのことかもしれなかった。今、はっきり聞いたように、司令官がこの訴訟手続きの信奉者ではなく、この将校にほとんど敵対的な態度を取っているという話からも、それはさらにありそうだと感じられた。

その時、将校の怒りの叫び声を聞いた。ちょうど、疲れも見せず、有罪人の口の中に将校がフェルトの出っ張りを押し込んだ時であった。有罪人が、抑え切れない吐き気に襲われ、ウッと目を閉じ、嘔吐したのである。将校は、慌ててフェルトの出っ張りから男を引き剥がし、どうにか顔を穴の方に向けようとした。しかし、時すでに遅く、汚物はもう機械を伝い、下まで垂れ落ちていた。「全部、司令官の所為だ！」と、将校は叫び、分別をなくし、前方の真鍮の棒をグラグラと揺すった。「家畜小屋みたいに、機械が汚れている。」そして、そこで何が起きたかを、震える手で、旅行者に伝えた。「処刑の一日前から食事は一切禁止だというのを、わたしは、何時間もかけて将校に教えることはしませんでした。そして、司令官のあの新しい柔軟な方針は、わたしの考えとは似ても似つきません。この男が拘留される前のこと、司令官の取り巻きのご婦人方が、男の首の周りにぎっしり砂糖菓子を詰めていました。こいつの全人生は、悪臭芬々たる魚介類で培われていたのに、今では砂糖菓子を食わされるのです！　だが、そんなことはどうでもいい。何も異論はありません。ただ、なぜ新しいフェルトは調達されないのか。三ヶ月も前から申し込んでいるのに。吐き気を催さず、どうしてフェルトを口に入れられます？　死にゆく百人以上の人々が、しゃぶって、噛んできたフェルトですよ。」

有罪人は、頭を下に向け、心穏やかな様子であった。兵士は、有罪人のシャツで機械を磨くのに忙しそうであった。将校が旅行者のところに来た。旅行者は、何事かを予期し、一歩後ろへ退っていたが、将校は片手で旅行者を制し、自分の方にグッと引き寄せた。「内緒で話したいことがあるのです。」と、彼は言った。「よろしいです？」「もちろんです。」と、旅行者は言い、下を向き、耳を傾けた。

「今や、この流刑地には、あなたが、今回、賛嘆の機会をもたれたこの訴訟手続きや刑の執行への公式の賛同者は、ひとりもいません。わたしこそが、その唯一の代弁者、同時に、前司令官の遺産の唯一の代弁者です。この訴訟手続きをさらに拡充しようとい

う考えは、わたしにはありません。今、手元にあるものの維持に、全力を使います。前司令官の存命中には、この流刑地にもまだ信奉者たちが溢れていました。前司令官の説得力なら、わたしにも一部、もちあわせがありますが、権力となると、全く欠けています。結果的に、信奉者たちは潜伏しています。まだ大勢、いるにはいますが、誰もそうだと告白はしてくれません。もし、今日（つまり、刑の執行日）、喫茶店まで行き、あちこち聞き回っても、きっと曖昧な言葉しか返ってきません。それは静かな信奉者たちですが、今の司令官の支配の下、現行の見解がある中では、わたしの手駒にはなりません。ところで、わたしからも質問です。この司令官と、彼を悪の道に引き入れんとするご婦人方の所為で、このような畢生の大作が、」――彼は、例の機械を指で差した――「滅んでもよいのでしょうか？　そんなことが許されます？　この島に、かりに数日間、外国人として逗留しているに過ぎないとしても？　とはいえ、一刻も無駄にはできません。わたしの裁判権に対抗する何かがすでに準備されています。司令部では、もう何度も協議がされています（わたしは呼ばれていません）。それどころか、あなたの今日の訪問すら、この状況全体に特有なことなのだろうと、わたしは見ています。やつらは臆病なので、それであなたを寄越したのでしょう（あなたは、外国人ですから）。――もう少し前なら、処刑はどのくらい違う形で進んだことか！　すでに刑の執行の一日前には、この窪地全体が人で溢れていました。見物のためだけでやってきたのです。早朝になると、お供のご婦人たちを引き連れ、司令官が姿を現わします。ファンファーレが、この宿営地全体を目覚めさせます。全ての用意が整ったことをわたしが報告します。お歴々たちは、この機械の周囲に整列しています――上級官吏の欠席は許されません――。この藤椅子の山は、その時代のみすぼらしい残滓です。磨き上げられた機械は、ピカピカに光っています。ほとんど処刑がある度、新たに補給品が入ってきます。何百人もが見る前で――見物客は、ここから高台まで、全員がビッシリ爪先立ちです――、司令官自らの手で、有罪人が馬鍬の下に寝かされます。今日では、兵卒がやってよいとされる仕事が、当時は、裁判長のわたしの仕事でした。それは、誇りでもありました。さあ、処刑の始まりです！　妙な騒音で、機械の作業が妨げられることもありません。多くの人は見物すらしていません。それどころか、目を閉じ、砂の中に横たわっています。今、正義がなされつつあることは、皆が分かっています。静寂の中、聞こえるのは、フェルトで弱音化された有罪人の呻き声だけ。今日、この機械は、有罪人にフェルトが弱音化するより大きな呻き声を出させるには至っていません。しかし、当時は、今は使用禁止になった腐食用液剤が筆記用の針から滴り落ちていました。さあ、六時間目！　近くから見たいという全員の望みは叶えられません。司令官は、自らの洞察に基づき、特に子どもたちには配慮してやれと命令します。確かに、職務上、わたしは、いつでもそこにいられる人間でした。よくそこで、二人の小さな子どもを両方の腕にぶら下げていました。責め苛まれた顔に喜びの表情が浮かぶのを、皆で見い出したものでした。ようやく成し遂げられ、すでに過ぎ去ろうとするこの正義の光により、われわれの頬はどれほど照り輝いたでしょう！　何という時代だったのか、友よ！」自分の前に立つのが誰かを、明らかに将校は忘れていた。旅行者を抱き締めると、その肩に、彼はチョンと自分の頭を置いた。旅行者は、大いに困惑した。イライラした感じで、将校越しに向こうを見ていた。一方の兵士は、洗浄作業を終え、今もまだ飯盒から小鉢へ米粥を注ごうとしていた。

有罪人は、すっかり元気を取り戻したようだったが、そのことに気づくと、すぐに舌で米粥を舐め取ろうとし出した。その有罪人を、兵士は、何度も押し返そうとした。なぜなら、その米粥は、もう少し後の時間のためのものだったから。しかし、いずれにせよ、汚れた手を広げた兵士がそれに襲いかかり、飢えた有罪人の前で平らげてしまうのは、全く礼儀に即していなかった。

すぐに将校は気を取り直した。「動揺させる気はなかったのです。」と、彼は言った。「今、あの時代のことを分かってもらいようがないのは、おっしゃる通りです。ちなみに、まだ機械は作業をこなします。自動でも動きます。この窪地にポツンと置かれても、自動で作業するのです。そして、当時のように、穴の周りに何百人もの群衆が蠅のように集まらなくても、死体は、最後には、信じられないくらい軽やかに飛翔しながら、同じように穴の中に落ちます。当時は、穴の周りに丈夫な柵が必要でしたが、それはとうの昔に取り壊されました。」

旅行者は、将校から顔を背けるため、あてどなく周囲に視線を漂わせた。旅行者は、窪地の荒廃した様子を観察中というのが、将校の見立てであった。それゆえ、旅行者の両手を握り、視線を掴まえるため、少し身体の向きを変えながら、こう聞いた。「この不名誉には、もうお気づきですか？」

しかし、旅行者の返事はなかった。しばらくの間、将校は彼を放っておいた。大股開きで、両手を腰に当て、静かに立ちながら、ジイッと地面を見つめていた。それから、励ますように微笑むと、旅行者に言った。「昨日、司令官があなたを招待した時、わたしはあなたのすぐ横にいたのです。歓迎の言葉を、聞いていました。司令官は、知りあいでしてね。この招待での司令官の狙いが何かは、すぐに察しがつきました。彼には、わたしに干渉できるだけの大きな権力があります。それでも、そういう方面に出ることなく、あなたという名声ある外国人の判断に、委ねようというのです。その計算は、念が入っています。この島にやってきて、あなたはまだ二日目です。前司令官や、あの方の考えについてはご存知でない。ヨーロッパ的な考えにも執着がおありだ。おそらく根っからの一般的な死刑反対論者、とりわけ、この種の機械処刑の反対論者のひとりなのでしょう。おまけに、公衆の関心を引かず、すでに、多少、壊れ気味の機械の上、みじめに処刑が進行中なのもご覧になった――さあ、こういう全てから（と、あの司令官はお考えです）、今や、わたしの訴訟手続きをあなたが正当と見なさないというのは、それほどありえない話でしょうか？　そして、もしあなたがこのことを正当と見なさないとして、このことをあなたは（わたしは、まだ司令官の筋書きに沿って話しています）、黙っていられないでしょう。なぜって、それでもまだ、あなたはご自身の百戦錬磨の確信に信頼を置いていらっしゃるから。もちろん、あなたは沢山の民族の様々な特性をご覧になり、それらの尊重についても学んでこられた。だから、ひょっとしてお国のように、全力で訴訟手続きに反対はされないかもしれない。しかし、司令官が求めているのは、そういうことでもないのです。ほんのちょっとの、本当に何気ない一言で十分です。うわべさえ彼の希望通りなら、あなたの確信に従っていなくても構いません。あらゆる手管を使い、彼があなたを質問攻めにするのは間違いないでしょう。そして、取り巻きのご婦人たちも、車座になり、その話に耳を傾けるでしょう。きっとこんなことをあなたは言うはずです。われわれの国では、裁判所の訴訟手続きが、少々、違っております。判決の前には

尋問があり、拷問があったのは中世の時代まででしたといった具合です。これら全ての発言は、わたしの訴訟手続きを脅かさない程度の無邪気な発言ですが、自明であると同時に正しくもあると、あなたの目には映っています。ところで、司令官はこれをどう受け止めるのか？　あの善良な司令官が、すぐに椅子を脇へ置き、バルコニーに急ぐ様が目に浮かびます。取り巻きの婦人たちも、雪崩をうって彼の後を追います。彼の叫び声すら聞こえるようです――婦人たちは、雷の声と呼んでいますが――。そう、こんな感じの声です。わが国の津々浦々の裁判所の訴訟手続きの調査を指示されたヨーロッパのある大学者が、古い習わしに従ったわれわれの訴訟手続きを、非人間的とおっしゃった。そのような御仁が、こういう判断をした後で、その訴訟手続きを放置することは、もちろん、できません。それゆえ、今日をもってわたしは命令します――と、まあ、そんな具合です。あなたは介入しようとし、彼が断じるようなことは口にせずに、わたしの訴訟手続きを非人間的とおっしゃることもしない。反対に、ご自身の深い洞察力と呼応するように、そのことは極めて人間的で、極めて人間らしいとお考えになり、この機械装置を賛美すらしている――しかし、それではもう手遅れなのです。あなたはバルコニーまで出られませんが、そこはもう婦人たちで一杯です。あなたは、自分がここにいると気づかせようと、大声を出そうとしますが、その口は婦人たちの手で塞がれ――わたし自身と前司令官のこの作品は、消えてなくなるのです。」

旅行者は、笑いを押し殺さねばならなかった。とすると、今までは極めて困難と思っていた課題が、実はひどく簡単だったということになる。のらくらした感じで、彼は言った。「わたしの影響力を買い被り過ぎです。司令官はわたしの紹介状をお読みなので、わたしが裁判所の訴訟手続きの専門家ではないことは、先刻、ご承知でしょう。何を言おうと、それは一私人としての言葉です。そんなことで、わたしが任意で選ばれた他の誰かよりましなことを言えるはずがありません。どっちにしろ、この流刑地では恐ろしく強大な権力があると、わたしが思っている、あの司令官よりはるかにつまらぬことしか、わたしには言えないのです。とはいえ、この訴訟手続きに対するあの方の意見が、お考えのようにきっぱりしたものだというなら、わたしが危惧しているように、わたしのささやかな助けなど求めずとも、この訴訟手続きは終わりを迎えるのでしょう。」

将校は、もう話を飲み込んだであろうか？　いや、まだ飲み込んではいなかった。将校は、激しく首を振ると、有罪人と兵士の方を一瞥し（二人は、ギクリとし、米粥から口を離した）、旅行者の本当に真横までにじり寄り、顔ではない、上着のどこかへ目をやりながら、前よりずっと低い声で、言った。「あなたには司令官が分かっていない。あの方やわれわれ全てにとり、ある意味、あなたは――こういう言い方を許して下さい――害のない立場にあるのです。あなたの影響力は、いくら高く評価してもし過ぎではない（わたしの言うことを分かって下さい）。あなただけがこの処刑に立ち会うと聞いた時は、本当に、天にも昇る気もちでした。司令官の命令は、わたしへのものかもしれませんが、そうだとしても、自分に都合のよい方に転ばしてやろうと、わたしは思っています。誤った唆しや蔑むような目つき――それは、処刑の大部分に立ち会う際には不可避です――には、あなたは惑わされず、わたしの説明を聞き、この機械を見、今、処刑を見物しようとしています。きっと判断は固まっているのでしょう。まだ少し不安なのかもしれませんが、処刑の光景を見さえすれば、それは消し飛ぶのでしょう。で、今、あなたにお

願いです。司令官からわたしを守って下さい！」

話し続けようとする彼を、旅行者は押し止めた。「そんなこと、どうしてもできません。」と、彼は叫んだ。「無理です。不利益も与えられないかわり、利益も与えられません。」

「できます。」と、将校は言った。旅行者は、将校が両方の拳を固めているのを、少しビクビクしながら、見ていた。「できます。」と、さらに語気を荒らげながら、将校は繰り返した。「一計があります。成功は間違いなしです。あなたは、自分には影響力がないと思っている。でも、あるのです（わたしには分かります）。とはいえ、あなたの側にも正しさがあるのは認めるとして、こういう訴訟手続きの維持のためには、あらゆること（場合によっては、不十分なこと）を試すことも必要なのではありませんか？　ということで、一計をお聞き下さい。その実行のためには、今日、この流刑地で、訴訟手続きに関する判断をできるだけ控えてもらうのが何より必要になります。そのものズバリを聞かれぬ限り、何も口にしないで欲しいのです。つまり、発言を短かく、ぼかすのです。その話をあなたに振り向けるのは困難で、そのことであなたは不機嫌にもなり、何度かその話をせねばならなくなると、ほとんど悪態をつくことすらあると、皆に信じ込ませるのです。嘘をつくんじゃありません。全然、違います。そっけなく答えるとか、そんなことです。例えば、ええ、処刑は見せてもらいましたとか、はい、説明は全部、聞きましたとか。皆が、あなたに読み取るであろう不機嫌さには、実際、十分な理由がありえます（司令官が考える意味では、そこに不機嫌さなどないということになるのでしょうが）。もちろん、司令官は完全に誤解すると、自分の意味で解釈します。それを前提に、わたしの計画は組んであります。明日は、司令部で司令官の主宰による上級行政官全員の大きな会議があります。そういう会議でのやり取りから見世物を引っ張り出すやり方は、もちろん、司令官は心得ています。そこには廊下が作られ、いつも傍聴人たちで溢れています。審議には、わたしも参加するように言われていますが、嫌悪感で身体をブルブルと震わせています。さあ、いずれにしても、間違いなく、あなたはこの会議に招待されます。もし、今日、わたしの計画通りに行動してもらえるのなら、この招待は切なる要望に変わります。そして、何か分からない理由でまだ招待が届いていなければ、むろん、招待を願い出てもらいます。そうすれば、招待は間違いなく受け入れられます。さあ、そういうことで、明日、あなたは、取り巻きの婦人たちと一緒に司令官の桟敷席に着座します。司令官は、何度も上目づかいの視線を送り、そこにあなたがいることを確認します。色々な、どうでもいい、下らない、傍聴人だけのために用意したような話題の後――大抵は港湾整備の話です。万事が港湾整備！――、裁判所の訴訟手続きの件がもち出されます。司令官からその話が出ない、あるいは十分に早く出ない場合は、わたしの方で出すように取り計らいます。スッと立ち上がり、今日の処刑の報告を行ないます。ごく簡単に、この報告の話だけを。こういう報告は、通例、あの場ではやらないのですが、それでもやります。司令官は、いつものように親しげな微笑みを浮かべ、ありがとうと言うと、自分を抑え切れず、このチャンスに飛びつきます。たった今（とか、そんなことを言うでしょう）、処刑の報告を受けました。わたしがこの報告に加えたいのは、まさにこの処刑に、かの大先生が立ち会われたというその点だけです。われわれの流刑地にとっての格別の名誉となるこの方の訪問については、あなた方も皆、ご存

知でしょう。本日の会議ですら、その方のご臨席により、意義が高められています。さあ、大先生にこんな質問を投げてみませんか？　この古い慣習やそれに先立つ訴訟手続きから、あなたはこの処刑をどう評価しますか、というのがそれです。もちろん、万雷の拍手、全会一致の賛同です（わたしが、一番、手を叩きます）。司令官は、あなたの前で一礼すると、次のように言うでしょう。それでは、全員を代表し、わたしから質問をします。すると、あなたが手摺りのところまで出ます。両手は、皆の見えるところに置いて下さい。でないと、婦人たちに掴まれ、指で弄ばれますからね。――さて、そこでようやくあなたが口を開く。そこからの緊張の時間をどうしてしのぐか、わたしには見当もつきません。話をする時は、自分を箍に嵌める必要はありません。真実を元に、がなり立てればよいのです。手摺りの上に身を乗り出し、がなり立てるのです。ええ、そう、司令官に向かい、自分の意見を、揺るぎのない自分の意見を、がなり立てます。しかし、おそらくあなたは、そんなことはしない。それは、あなたの性格には合わない。お国では、そういう場面では、多分、違った対応になる。それはそれで正しく、完全に十分なことでもある。立たなくてもいいのです。言うのは、二言三言で。それでもまだあなたの下にいる役人には聞こえるくらいの小さな声で囁きます。それで十分です。処刑への不十分な参加者、キイキイと音を立てる歯車、切れかけの革紐、吐き気を催すフェルトについて、自分から話す必要もありません（ええ、ありませんとも）。他の全ては、こっちで引き受けます。信じてもらえますか、わたしが話を振ることで、司令官は広間から追放はされずとも、膝を突き、こう白状することを強いられます。前司令官、わたしはあなたの前にひれ伏しますと。――これがわたしの一計です。彼にそうさせる方向で、手伝っていただけませんか？　そして、もちろん、あなたはそうしたいと望んでいるし、そうすべきでもあります。」そうして、将校は、旅行者の両腕を掴まえ、苦しげに息を吐きながら、その顔をジッと覗き込んだ。最後の言葉は悲鳴のようであり、兵士や有罪人はハッと聞き耳を立てた。二人は、何も分かっていなかったが、それでも食事の手を止め、モグモグ咀嚼しながら、旅行者の方に視線を投げていた。

旅行者には、返すべき答えは何より最初から明らかであった。彼は、人生で余りにも多くの経験を積み、その場で動揺するなど、ありえなかった。基本的に、彼は誠実であり、いかなる恐怖も感じなかった。それでも、今、兵士や有罪人を見た時、ほんの一瞬だけ、彼はたじろいだが、しかし、結局、言うべきことを言った。「無理です。」何度も目をシバシバさせながら、将校は、彼から視線は外さなかった。「その説明をしますか？」と、旅行者が聞いた。将校は、黙って頷いた。「ここの訴訟手続きには反対なのです。」と、ようやく旅行者が口を開いた。「あなたが秘密をうち明けてくれる前から――もちろん、どんな状況でも、この信頼を悪用するようなことはしません――、この訴訟手続きへの介入が正しいのか、この介入が成功のほんの少しの見込みしか生まないのかを、すでに考えていました。そういう場合、まず誰に相談すべきかは明らかです（もちろん、司令官にです）。あなたの言葉で、そのことはより明らかになりました。そして、そのことでようやく決心がついたというより、むしろ逆に、あなたの誠実な確信は、わたしを惑わせなかったまでも、深く悲しませたのです。」

将校は黙って立っていたが、機械の方に向きを変え、真鍮製の棒の一本を取り、少し身体を後ろに反らせ、あたかも全てが滞りなく進んでいるかを見定めるように、製図屋の

方を見た。兵士と有罪人は、お互いが友人になったようであった。有罪人は、きつく縛られた中でそうするのは大変であったが、合図を兵士に送った。兵士は有罪人に一礼した。有罪人は兵士に何かを囁きかけ、兵士はそれに頷き返した。将校の後に追いすがり、旅行者は言った。「わたしがどうするつもりか、まだあなたはお分かりではない。わたしの考えは、訴訟手続きについての考えを司令官にぶつけるというものです（ただし、会議の場ではなく、一対一で）。何かの会議に招待されるほど、ここに長逗留するつもりはありません。明日の朝にはもうここを発つか、少なくとも船に乗り込んでいるでしょう。」

将校は、何も聞いていないようであった。「つまり、この訴訟手続きに、納得していないんですね。」と、独り言をいうと、老人が子どものいたずらを笑いながら、その裏で本当の熟考を隠すような感じで、笑った。

「さあ、もう時間です。」と、最後に言うと、何かの要求、何かの参加への呼びかけを含むような明るい眼差しで、旅行者をジイッと見た。「何の時間？」と、不安げに旅行者は聞いたが、何の返事もなかった。

「もうお前は自由だ。」と、将校は有罪人にその国の言葉で告げた。最初、男は、その言葉を信じなかった。「だから、自由なんだって。」と、将校が言った。有罪人の顔は、初めて本来の生気を取り戻した。本当？　たまたま口から出た将校の気紛れに過ぎぬのでは？　外国の旅行者がお情けを恵んでくれたのか？　何が起きたのか？　男の顔は、そう尋ねるようであった。しかし、それも長い時間ではなかった。何であれ、許されるなら、実際、自由になりたかった。さて、馬鍬が壊れない程度に、男は身体を揺すり出した。

「革紐が切れてしまう。」と、将校が叫んだ。「大人しくしろ！　すぐにほどくから。」それから、合図を送った兵士と一緒に、仕事に取りかかった。一言も発せず、有罪人は静かに独りで笑っていた。ある時は左側の将校、ある時は右側の兵士に顔を向け、旅行者に目をやるのも忘れなかった。

「そいつを引っ張り出せ。」と、将校が兵士に命じた。馬鍬があるため、そうするには、少し慎重にやる必要があった。こらえ症のなさで、すでに有罪人は、背中に幾つかの擦過傷をこしらえていた。

そして、この頃から、将校は、ほとんどそれ以上、男に構うのを止めた。将校は、旅行者のところまで来ると、再びあの小さな革製の書類挟みを引き出し、パラパラとめくり、ついに探していた紙切れを見つけ出し、旅行者に示した。「読んで下さい。」と、彼は言った。「読めません。」と、旅行者が言った。「もう言いましたよね。この紙切れに何が書いてあるか、わたしにはさっぱり分かりません。」「もっとしっかり見て下さい。」と、将校は言い、一緒に読もうと、旅行者の側まで来た。それが何の助けにもならないので、恐ろしく遠いところにある小指で、何があっても、その紙には触れないぞという風に、紙の上方を辿りながら、この方法で、旅行者の読解を助けようとした。少なくとも、旅行者は、そのことで将校の気を引こうとの一心で、必死に頑張ろうとした。しかし、できないものはできなかった。すると、将校は、銘文の綴りを一文字ずつ区切って読み始め、それからもう一度、全文を一気に読んだ。「正しくあれ！――と、書いてあるんです。」と、彼は言った。「これなら、さすがに読めるでしょう。」旅行者が余りにも深く紙の上に屈み込むので、触られるという恐れから、将校は、それをさらに遠ざけた。今はもう、旅

行者は何も言わなかったが、今もまだそれが読めないのは、明らかであった。「正しくあれ！――と、書いてあるんです。」と、もう一度、将校が言った。「そうなんでしょうね。」と、旅行者が言った。「そう書いてあると思います。」「まあ、それならいいです。」と、少なくとも部分的には満足を感じつつ、将校はそう言い、紙切れを手にしたまま、梯子を登った。それから、大いに用心しながら、製図屋の中にその紙切れを置き、どうやら歯車装置を完全に並び替えたようであった。それは極めて骨折りな作業で、本当に小さな歯車が問題になっていたのに違いない。将校の頭は、時々、製図屋の中に完全に消えた。本当に正確に歯車のことを調べ上げねばならなかったのである。

旅行者は下からずっとこの作業を目で追っていた。首が凝ってきた。燦々と光を注ぐ空全体のため、両目がチリチリと痛んだ。兵士と有罪人は、二人で作業に没頭していた。すでに穴の中にあった有罪人のシャツとズボンは、兵士の銃剣の切っ先を使い、引っ張り上げられていた。シャツは恐ろしいほど汚れていた。有罪人はバケツでそれを洗い、それから、そのシャツを着、ズボンを穿いた。兵士も有罪人も大声で笑うしかなかった。なぜなら、衣類の背中は二つに裂けていたのである。自分には兵士を楽しませる義務があると、有罪人は思ったようであった。切れた服のまま、男は兵士の目の前でクルリと一回転した。胡座をかいた兵士は、膝をうって笑った。それでもまだ、二人はその紳士の存在を考慮し、出しゃばり過ぎないようにしていた。

上で作業を終えるとすぐ、微笑みながら、もう一度、将校は、全ての部品にザッと目をやった。今度は、それまで開いていた製図屋の蓋をパタンと閉じ、下に降りるや、穴の中を覗き込み、それから有罪人の方を見、男が服を取り戻すのを、満足そうに眺めていた。そして、手を洗うため、バケツのところへ行ったが、不快な汚れが手遅れの状態にあるのに、彼は気がついた。今は手が洗えないのを残念がり、最後は砂に両手を突っ込むと――この代替策は、全く不本意だったが、甘んじるしかなかった――、そこから立ち上がり、制服の上着のボタンを外し出した。その時、襟の後ろに無理に押し込んであった二枚の婦人用ハンカチが、まず彼の手の平にハラリと落ちた。「さ、ここにお前のハンカチがある。」と、彼は言い、それを有罪人に投げつけた。それから、旅行者に向かって説明しながら、「ご婦人たちからの差し入れ品です。」と、彼は言った。

明らかに大慌てで、そういう感じで制服の上着をパッと脱ぎ、それから全裸になった彼は、それでもその服のことは恐ろしく丁重に取り扱った。それどころか、軍服についた銀色の飾り紐をわざわざ指で撫で上げては、房飾りをパッパと振り、正しい形に整えていた。ただ、他方、ある衣類の手当てを終えるとすぐ、不機嫌そうに例の穴にポイッと投げ込んだのは、ほとんどこの几帳面さには似あわなかった。手元に残った最後のものは、吊り紐のついた短剣であった。彼は、鞘から剣を抜き、へし折ると、短剣、鞘、吊り紐の全部をグッと掴み、恐ろしい勢いで投げたので、穴の底では、それらがぶつかりあい、ガチャガチャという音がした。

今や、彼はそこに全裸で立っていた。旅行者は唇を噛みながら、一言も口にしなかった。これから何が起きるかは分かっていたが、将校が何をするにせよ、止める権利は彼にはなかった。そして、将校がしがみつく裁判所の訴訟手続きが、本当に今にも改まろうとしている――ひょっとして、旅行者の介入で（介入の義務はあると、彼は感じていた）そうなるのかもしれなかったが――のなら、今の将校の振る舞いは完全に正しかっ

た。旅行者が将校の立場にあっても、それ以外には振る舞いようがなかったであろう。

兵士と有罪人は、最初、何も分かっていなかった。初めのうちは、そちらを見ようともしなかった。有罪人は、ハンカチを取り戻したのを大いに喜んだが、いつまでも喜んではいられなかった。というのも、思いも寄らぬ、素早い動作で、兵士がそれを掴み取ったのである。さあ、今度は、有罪人が兵士のベルトの奥からハンカチを引き出す番であった（兵士は、ベルトの奥にそれを押し込んでいた）。しかし、その辺は、兵士にも抜かりはなかった。二人は、そうして半分ふざけた感じで、喧嘩をしていた。将校が完全に衣服を脱いだところで、ようやく二人はわれに返った。とりわけ有罪人の方が、何か大きな変化が生じたという予感に襲われたようであった。自分の身に起きてきたことが、今や、将校の身に起こっていた。おそらくそれは、究極のところまで行くのであろう。きっと外国人の旅行者が命令を下したのだ。つまりは復讐だ。最後まで苦しむのは自分じゃない。最後の報いを受けるのはやつだ。今や、声にならぬニンマリ笑いが顔中に広がり、もう消えることはなかった。

そうして、将校は機械に向かった。将校がこの機械に習熟しているのはずっと前から分かっていたが、それでも、今、彼がそれに取り組みつつ、やすやすと操作する様子は、ほとんど舌を巻くばかりであった。馬鍬に手を近づけただけで、それは何度も上下しつつ、彼を受け入れるあるべき位置にスッと収まった。寝台の縁を掴むだけで、もうそれはブルブルと震動を始めた。フェルトの出っ張りが口の前まで来ると、どれほどそれが望ましくないことかを、人々は感じた。しかし、躊躇は一瞬であった。すぐに肚を決め、彼はそれをパクリと口に含んだ。準備は完了した。ただ、あの革紐だけは、まだ元のところにぶら下がっていたが、どうやら用済みのようであった。将校を縛る必要は、全くなかったのである。その時、緩んだ革紐に有罪人の注意が向いた。革紐できつく締めなければ、処刑は未完成というのが、この男の考えであった。男は、熱心に兵士に目配せをした。二人は、将校を縛り上げようと、そこへ駆け出した。一方の将校は、製図屋の起動スイッチのクランクを押し倒すため、すでに片足を伸ばしていた。集まってくる二人に、彼がそこで気づいた。それゆえ、その片足は引っ込め、縛られるがままになっていた。もっとも、今度はそのクランクに足が伸ばせなくなっていた。おそらく、兵士も有罪人も、そのクランクは見い出せないであろう。旅行者は、こちらからの手出しのはするまいと決意していた。ところが、そんな必要すらなかった。というのも、革紐を装着するや、もう機械は稼働を始めたのである。寝台は震え、針は皮膚の上を踊り、馬鍬はあちらこちらを漂った。旅行者は、すでにしばらく一点を見据えていたが、機械の中の歯車がキイキイ軋み出すという話を、フッと思い出していた。しかし、全ては静寂の中にあった。ブンという物音すらしなかった。

このように静かに作業が進んだため、この機械は、文字通り、注意を集めなくなった。旅行者は、兵士と有罪人の方をボウッと見ていた。一番元気なのは、有罪人であった。機械に関するあらゆることが、有罪人の興味を引き、ある時はしゃがみ、ある時は背伸びをし、絶えず人差し指をピンと伸ばしては、兵士に何かを示そうとし、そのことが旅行者を堪えられない気持ちにした。最後までここにいるというのが、彼の決意であった。しかし、ずっと二人を正視しているのは、堪えられなかった。「家に帰りなさい。」と、彼は言った。おそらく兵士には、その用意があるようであった。しかし、有罪人は、命令

をまさに刑罰のように受け取っていた。すがるように両手をあわせながら、ここにいさせて下さいと、男は言った。旅行者が、首を横に振りながら、その訴えを撥ねつけると、男は、跪拝すらしてきた。ここでは命令の効力がないと見て取った旅行者は、近くまで行き、二人を追い払おうとした。すると、上の製図屋のところで物音がした。チラッとそっちに目が行った。やはり歯車がよくないのか？　しかし、そういうことでもなかった。製図屋の蓋がゆっくりともち上がり、やがてパタンと開いた。ひとつの歯車のギザギザの部分が姿を現わし、せり上がり、すぐに歯車全体が剥き出しになった。まるで何かの巨大な力で製図屋が捻り潰されて、そのため、この歯車の空間はもう残されていないとでもいうかのように。歯車は、製図屋の端のところまで転がり、そこからストンと落ち、まだしばらくは倒れず、砂の上を転がった後、パタンと倒れた。ところが、上からはさらにひとつ、別の歯車がせり上がっていた。無数の、大きな歯車、小さくて見分けもつかない歯車群がそれに続いた。そのどれもが同じようになった。つまり、さあもう製図屋は空になったぞといつも思うのに、その度、また新しい、とりわけ多くの歯車群からなる塊が現われては、またズドンと落ち、砂の上を転がった後、バタンバタンと倒れたのである。このような出来事にうっとりさせられ、有罪人の頭からは、旅行者の命令などすっかり消えていた。歯車群は、有罪人の心を完全に掴んでいた。男は、常に新しい歯車を拾い上げたいと思ったが、同時に、自分を助けて欲しいと兵士にせっついたり、驚いて手を引っ込めたりした。なぜなら、次から次に歯車は現われ出たが、それらは、少なくとも最初に転がり出す時は、いつも彼を驚かせたのである。

一方の旅行者は、ひどく落ち着かない気もちでいた。機械は、明らかに崩壊に向かっていた。それが静かに進行していると考えたのは、見当違いであった。旅行者は、これからは、自分が将校の面倒を見るという気になっていた。というのも、もう将校は、自分では面倒を見られなくなっていたのである。ところで、歯車の落下に全神経が集中していた間に、機械の他の部分への監視がおろそかになっていた。今、製図屋が最後の歯車を吐き出した後、それでも彼が馬鍬の上に屈み込んでみると、新たなさらにひどい驚きに襲われた。馬鍬はもう書き込んでなどいなかった。ただズブリと突いていた。寝台は踊ってなどいなかった。ただ震えながら、針山に向け、彼をもち上げようとしていた。旅行者は、何とか手を出せないか、できれば全体を止めようと考えた。こんなものは、将校が達成を目論んだ拷問とは似ても似つかない、ただの直接殺人であった。彼はグッと両手を延ばした。だが、そこではすでにいつもなら十二時間後に初めてそうなる形で、刺し貫いた身体をくっつけて、馬鍬がせり上がっていた。血は、水でも薄められず、百筋の奔流を作りながら、流れ落ちていた。今度ばかりは、樋も役立ずで、あの最終的な機能も、今はすっかり無益であった。肉体は、針山から離れず、血をドクドクと溢れ出させながら、落下もせず、穴の上で宙吊りになっていた。馬鍬は、元の位置に戻ろうとしたが、まだ重荷が下ろされていないのに気づいたとでもいうように、それでも穴の上に止まろうとしていた。「ちょっと手伝って！」と、兵士と有罪人に向かい、旅行者は叫ぶと、将校の両足にパッと掴まった。そこで、両足に身体ごと抱きついてやれと、彼は思った。例の二人には、別の方から将校の頭に抱きつかせよう。そうすれば、針山からゆっくりと引き剥がせる。しかし、今や、二人はやってくる決心がなかなかつかなかった。有罪人は、すっかり背中を向けていた。旅行者は、二人のところまで飛んでいき、将

校の頭の前まで力ずくで押しやった。そして、ほとんど本意ではない形で、そこで死者と対面させられた。まだ生きているような顔。約束された救済の兆しなど、一切、なかった。他の全員が機械の中に見い出したものを、将校はそこに見い出せなかった。唇は硬く結ばれ、両目は見開かれていた。そこには、生前の印象が浮かんでいた。まなざしは穏やかで、確信に満ちていた。一本の太い鉄製の刺の先端が、額を刺し貫いてはいたが。

兵士と有罪人を後ろに従えながら、旅行者が、当てずっぽうで流刑地のとある住宅地に辿りついた時、そのうちのひとつの家を兵士が指で差し、言った。「これがその喫茶店です。」

ある家の一階に、奥行はあるが、天井高はない、壁と天井が煤だらけの、洞窟のような一部屋があった。間口は、全てが道に向かって開いていた。この喫茶店は、流刑地の他の家々（司令官の宮殿風の建築も含めて、全てがひどく荒廃していた）と、ほとんど見分けられなかったが、それでも、ある種の歴史的建造物という印象を、旅行者の胸に抱かせた。過ぎ去った日々の権勢を、彼は感じた。同伴者たちを従えながら、近くまで行き、喫茶店の前の道の上に置かれた空のテーブルの間を通り抜けると、部屋から漂う、冷たく、カビ臭い空気をグッと吸い込んだ。「前司令官は、ここに埋葬されています。」と、兵士が言った。「墓地の敷地は、牧師から駄目と言われました。しばらく埋葬地は決まりませんでしたが、結局、ここに埋められることになりました。この辺の事情は、むろん、将校からは、何も説明がなかったでしょう。なぜなら、当然、そのことを最大の恥辱と思っていましたから。それどころか、何度か、前司令官を夜に掘り返そうとしていました。とはいえ、毎回、追い払われましたが。」兵士の言葉が信じられなかった旅行者は、「その墓はどこに？」と、聞いた。すぐに兵士と有罪人が駆け寄ると、グッと伸ばした二本の手で、墓石が置いてある方を差した。何脚かの椅子に数人の客が座っている後方の壁のところまで、二人はグイグイと旅行者を引っ張った。おそらく、それは港湾労働者たち（黒いキラキラと光る短い髭を顔一面に生やした屈強な男たち）だったのだろう。全員が上着なしで、ズボンも擦り切れていた。貧しい、うちひしがれた人々。旅行者が近寄ると、何人かは腰を上げ、壁に身体を押しつけながら、彼が来るのを待った。「ありゃ余所者だ。」と、旅行者の周りで囁く声がした。「墓を見るつもりなんだ。」テーブルのひとつを彼らが退けると、その下に本当に墓石があった。飾り気のない石で、テーブルの下に隠せるくらいの高さしかなかった。そこに小さな活字で碑文が書いてあった。読み取るには、跪かねばならなかった。そこにはこう書いてあった。ここに前司令官が眠る。今は名を明かせぬ信奉者らが、ここへ墓穴を掘り、墓石をうち立てた。巷では、ある一定期間の後、この司令官が復活し、流刑地を奪還すべく、この家から信奉者たちに号令を発するという予言がある。信じよ、そして、身を潜めよ！　全てを読み終わり、スッと立ち上がると、自分を取り囲むように、男たちも腰を上げ、笑っているのに気がついた。男たちは、旅行者と一緒に碑文を読み、そこに滑稽なところがあるので、お前も俺たちの考えにあわせろと、旅行者に求めているようであった。旅行者は、そのことには気がつかないように振る舞った。何枚かの硬貨を男たちに与え、テーブルが墓の上に据え直されるまで、しばらく待ち、喫茶店に別れを告げ、港に向かった。

兵士と有罪人にはその喫茶店に知った顔があり、その知りあいが、二人を引き留めようとした。しかし、すぐに身を引き離したに違いなかった。なぜなら、旅行者が渡し舟

に繋がる長い桟橋の真ん中にようやくやってきた時、二人はもう彼の後をついてきたのである。おそらく、ギリギリの最後まで一緒に連れていってくれと、旅行者を拝み倒すつもりなのだ。汽船への渡しについて、旅行者が船頭と桟橋の下で交渉していると、二人は黙って桟橋を下りてきた。なぜなら、敢えて騒ぎ立てるつもりはなかったのだ。だが、二人が下に降りると、旅行者はもう渡し舟の上の人になっていた。今、まさに、渡し舟のもやい綱を船頭が緩めようとしていた。二人はまだ、飛び移れたかもしれなかった。しかし、旅行者は、ゴツゴツと結び目のついた重たい太綱を甲板からもち上げながら、それで二人に脅しをかけ、こちらへ飛び移るのを防いだのであった。

流刑地にて　フランツ・カフカ

翻　訳　　bambus

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社